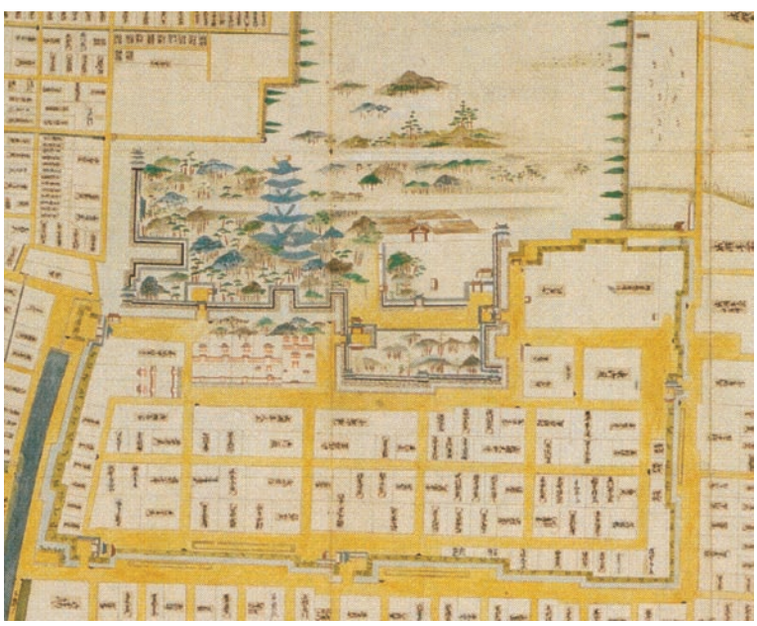
名古屋城三の丸遺跡

現地説明会資料



「名古屋并熱田図（部分）」徳川美術館蔵

（財）愛知県教育サービスセンター

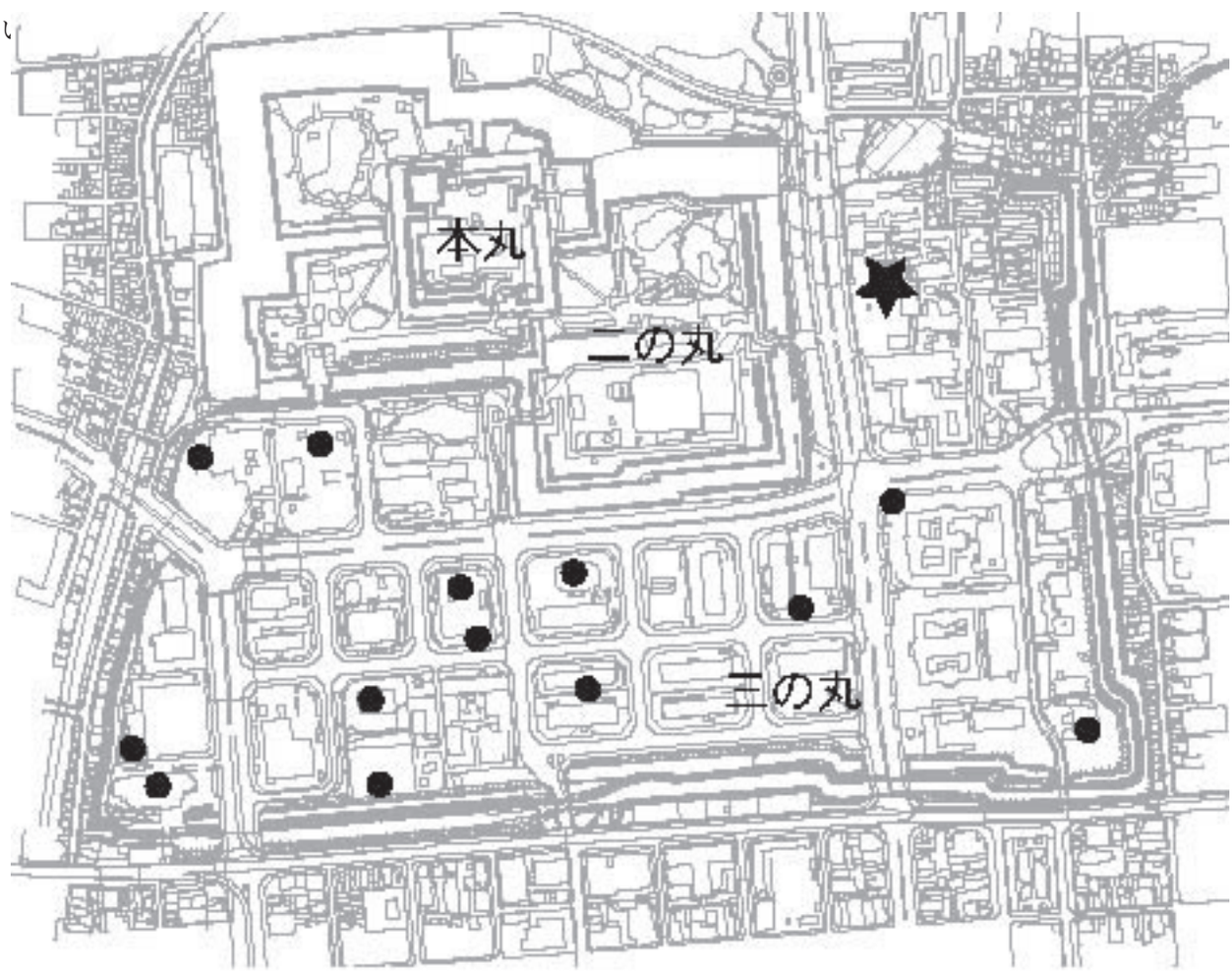
愛知県埋蔵文化財センター

２００２年9月7日（土）

調査の概要

名古屋城三の丸遺跡は、名古屋城の内堀と外堀の間にはさまれた、面積約 62 万平方メートルの敷地内に位置します。発掘調査は昭和 63(1988) 年以来、愛知県埋蔵文化財センターにより 6 地点、名古屋市教育委員会により 11 地点行われてきました。これまでの調査では、弥生時代から古代にかけての竪穴住居や古墳、戦国時代の那古野城に関わる武家屋敷の区画、江戸時代三の丸に住んだ上級武士の屋敷跡や道路などが確認されています。また遺物としては、旧石器時代の打製石器や縄文土器なども見つかっています。

今回の調査は、国立名古屋病院看護婦養成所大型化整備に先立って実施したものです。この一帯は名古屋城創建当初武家屋敷が立ち並んでいましたが、慶安 4 (1651) 年初代藩主徳川義直の娘お糸（普峯院）の婿として、京都から広幡忠幸を迎える際、屋敷を構えました。その後藩主の一族や元藩主の側室が住んだため、「御屋形」と呼ばれるようになりました。明治 6 (1873) 年、調査区一帯は陸軍の東練兵場になりましたが、太平洋戦争末期ここに名古屋陸軍病院の分院が建てられました。戦後国立名古屋病院となり、現在に至ってい



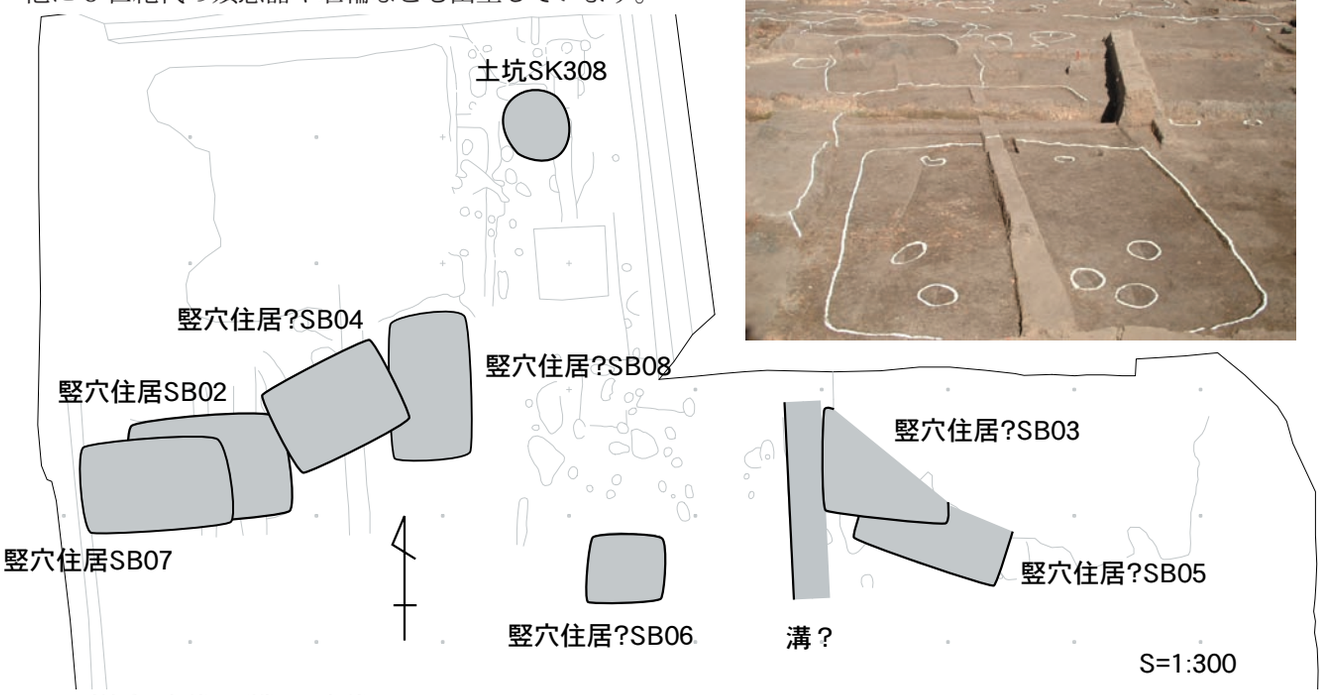
★印…今回の調査地点
●印…過去の調査地点

調査区の位置

１、古墳時代～平安時代（5 世紀～ 9 世紀）

6 世紀末～ 7 世紀初頭の土坑と 8 世紀～ 9 世紀の竪穴住居が確認されました。
土坑 SK308 は直径約 3m の擂鉢状の形で、中から須恵器の杯身や杯蓋や甑などが出土しました。

竪穴住居は（可能性のあるものまで含めると）8 基発見されました。長方形の形状で床が整地されています。この他に 5 世紀代の須恵器や埴輪なども出土しています。



２、鎌倉時代～戦国時代（13 世紀～ 16 世紀前半）

この時期は溝で囲まれた屋敷が確認されました。屋敷の中には掘立柱建物の他に井戸も発見されました。

鎌倉時代の屋敷を囲む溝は、溝 SD27 のように小規模なもので、このために部分的にしか確認できませんでした。井戸 SK310 は素掘り井戸で 14 世紀前半の遺物が出土しました。

戦国時代の屋敷を囲む溝は、溝 SD17 のように幅が約 1m、深さも約 1m の規模を持つものが現れます。15 世紀後半から 16 世紀前半の遺物が出土していることから、発見された屋敷は戦国時代の那古野城に伴うものと推定されます 。

戦国時代の那古野城の中心は現在の二の丸に

↑那古野城時代の様子（戦国時代の屋敷）

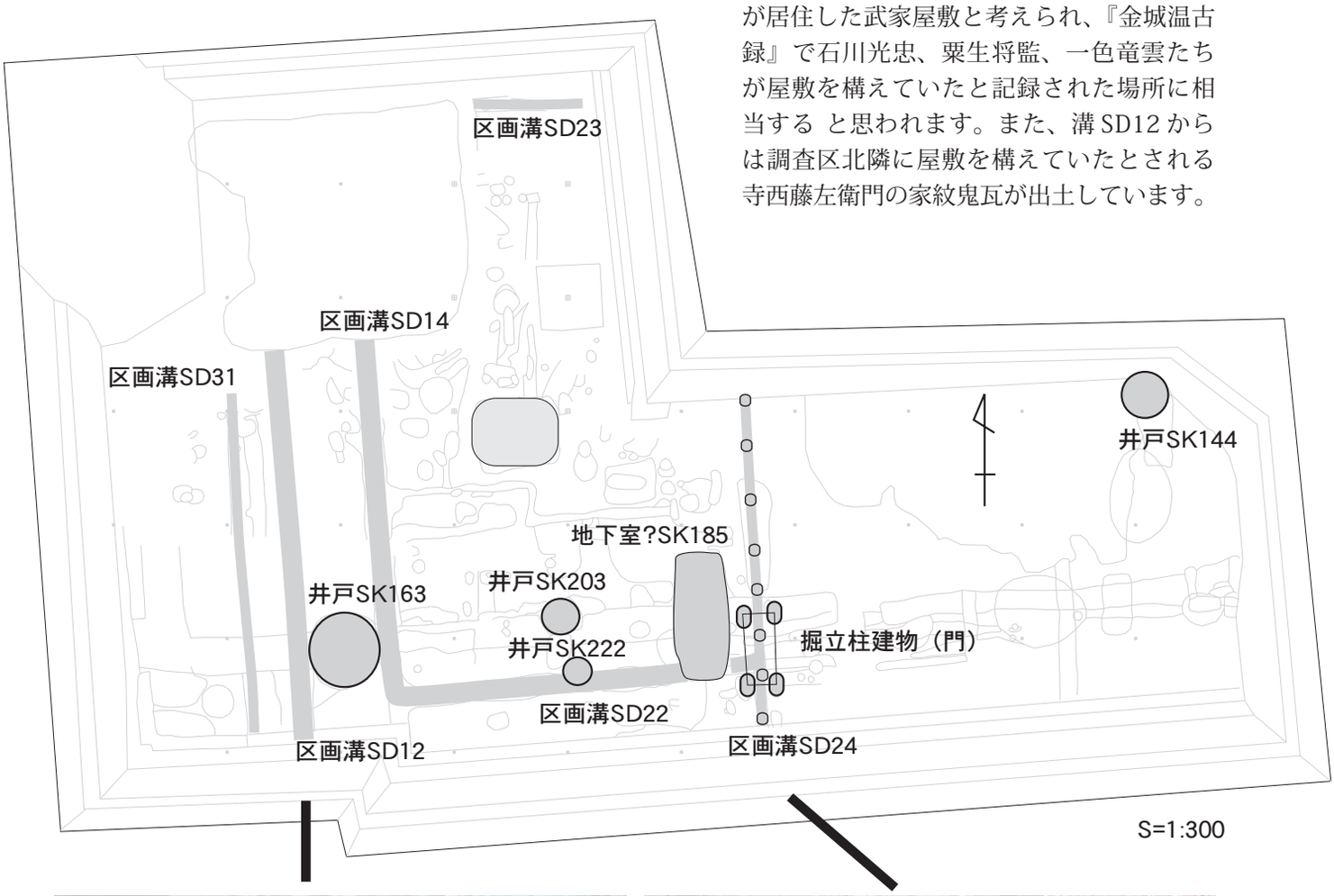
3、近世名古屋城の武家屋敷時代

（江戸時代初期：1610 年～ 1650 年頃）

屋敷や屋敷の内部を区画する溝、掘立柱建物、井戸、地下室？などの多くの遺構が見つかりました。

溝 SD12 と溝 SD14 は屋敷を囲む溝であり、間に挟まれた細長い空間が道路であったと考えられます。その後、溝の中に柱穴が等間隔に並ぶ布堀状の溝 SD24（塀の基礎構造）に屋敷割りの施設が変更されます。SD24 には掘立柱建物の門が設けられたようです。井戸 SK163 などからは 17 世紀前半の遺物が出土しました。

ここで発見された屋敷は、有力家臣たちが居住した武家屋敷と考えられ、『金城温古録』で石川光忠、粟生将監、一色竜雲たちが屋敷を構えていたと記録された場所に相当する と思われます。また、溝 SD12 からは調査区北隣に屋敷を構えていたとされる寺西藤左衛門の家紋鬼瓦が出土しています。



４、御屋形時代（江戸時代：1650 年頃～幕末）

庭園に伴う池、石組溝、地下室（ちかむろ）、掘立柱建物、井戸、廃棄土坑（ゴミ穴）などが見つかりました。

石組溝は合計で４条確認され、このうち石組溝 SD01 は内法幅が約 65cm を測る立派なものです。建物に伴う排水路などの施設と考えられ、その南側に礎石建物（御殿か？）が存在したのではないかと想定されます。地下室は平面形が 2.8m × 2.7m のほぼ正方形で、深さは約 1.8m を測ります。物資の貯蔵庫や作業場などに使用されたと考えられます。調査区の東側には大型の廃棄土坑があります。中からは大量の瓦や石材の他、底の方からは大工仕事で出てきた廃材などが出土しており、建物の増改築などの際に出てきた廃棄物を埋めて処分したものと思われます。

御屋形を普請する際に部分的に整地が行われたようで、厚さが 1m 弱を測る盛土が確認されました。前の時代の武家屋敷を埋め立て造成し、大きく屋敷割りが変更されたことが判明しました。

御屋形時代の様子（全体）→

石組溝 SD01 の様子→

トピックス　―庭園に伴う池―

池 SX02 は、約 10m 四方の大きさで深さは約 1.2m を測り、東西両側には内側に張り出し部（岬）を持つものです。

池の周囲の壁は大きな穴が開いた部分や漆喰の壁が残った部分などがあり、本来は巨石を池の周りに配置しその隙間を漆喰壁で覆い尽くしたものと考えられます（大きな穴などは石を抜き取った痕跡と推定しています）。そして、北側の壁が真直ぐになっていることや石の配置などから考えると、池は北から観賞するように造られていると思われます。おそらく、池の北側に書院などの建物が存在し藩主の親族達はそこから庭園の風景を楽しんだものと想像されます。

南西部分の漆喰で造られたスロープが水の取り入れ口で、池の「上手」になります。池の西側の張り出し部（岬）の先端には巨石が何個かはめ込まれていたと復元され、この部分が磯浜（岩）を表現していると考えられます。反対側の東側の張り出し部（岬）の上部には白くてきれいな玉石が敷かれており、この部分が洲浜（砂）を表現していると思われます。池の底は、古い段階では溝状の凹地が設けられ、新しい段階では黄色の粘土の上に玉石が敷かれていました。

全体として、右手奥（上流）から、磯浜や洲浜を経て、おそらく左手前に水が流れていく（排水施設は未確認）、という形の大名庭園と復元されます。名古屋城二の丸庭園（名勝）は大規模な回遊式庭園ですが、名古屋城の御屋形庭園は書院などから眺める池泉庭園と言えるでしょう。名古屋城三の丸にある他の家臣の武家屋敷ではこれまでの発掘調査で庭園遺構は見つかっておらず、名古屋城の御屋形で初めて庭園遺構が発見されたことは、御屋形が特別な存在であったことを示す貴重な事例となるでしょう。

池 SX02 の解説写真

5、陸軍時代（1873 年～ 1945 年）

陸軍第三師団が名古屋に駐屯した際に、この地点は東練兵場になっていました。

実際の発掘調査によって、東練兵場の地面とその上に造られた礎石建物が発見されました。発見された建物跡は終戦直前に建てられた名古屋陸軍病院第二分院の病棟と推定されています。

名古屋陸軍病院第二分院の病棟 (SB01) →

現国立名古屋病院地内の歴史

御屋形の歴史		日本の歴史
那古野城の時代		応仁の乱（1467 ～ 77 年）
今川氏豊、那古野城に入る（1522 年）		
織田信秀、氏豊から那古野城を奪う（1530 年代）		
織田信長、那古野城で生まれる？（1534 年）		
		桶狭間の戦い（1560 年）
		関ヶ原の戦い（1600 年）
	藩主	江戸幕府成立（1603 年）
徳川義直、尾張藩主就任（1607 年）	義直	
名古屋城築城始まる（1610 年）		
清須越し（1613 年）		大坂の役（1614 ～ 15 年）
義直名古屋城入城（1616 年）		
御屋形周辺ははじめ武家屋敷だった	光友（みつとも）	
		由井正雪の乱（1651 年）
御屋形の時代　（1651 年～ 1871 年）		
居住者		
広幡忠幸（ひろしはたただゆき）（八条院智仁（ともひと）親王の子、1651 ～ 63 年）		
お糸の方（義直の娘、忠幸の室、1651 ～ 73 年）		
松平義昌（光友三男、梁川（やながわ）松平家）		
敷地を東側の貞松院（ていしょういん）屋敷まで拡張（1685 年）		
徳川綱誠、藩主就任まで過ごす（1675 ～ 93 年）		
御屋形の称始まる		
松平義行（光友二男、高須松平家初代、1688 ～ 95 年）	綱誠（つななり）	
光友、隠居所に使用（1693 ～ 95 年）		
松壽院（光友の室、1693 ～ 1705 年）	吉通（よしみち）	
瑞祥院（吉通夫人、1702 年）		
梅昌院（綱誠の室、1709 ～ 30 年）	五郎太	
宣楊院（綱誠の侍妾（じしょう）、1731 ～ 43 年）	継友	享保の改革（1716 ～ 45 年）
	宗春	
	宗勝	
この間、居住者不明	宗睦	寛政の改革（1787 ～ 93 年）
聖聡院（松平治行の室、1802 ～ 04 年）	斎朝（なりとも）	
維君（宗睦の娘、1808 年）		
俊恭院（斎温の室、1839 ～ 40 年）	斎温（なりあつ）	天保の改革（1841 ～ 43 年）
	斎荘	
この頃、御屋形を御広敷役人詰所に利用		
	慶臧	
	慶勝（よしかつ）	
	茂徳（もちなが）	明治維新（1868 年）
茂徳、隠居所として使用（1863 ～ 66 年）	義宜	廃藩置県（1871 年）
陸軍東練兵場の時代（1873 ～ 1945 年）		
御屋形の跡地に東練兵場を造成（1873 年）		
名古屋陸軍病院東練兵場臨時分院建設		太平洋戦争（1941 ～ 45 年）
国立名古屋病院設立（1945 年）		

遺構を探すため掘りさげています

地下室から出土した遺物の数々

緑釉瓦が池から出土しました

池の作られ方を調べています

用語解説

御屋形

慶安四（1651）年、尾張徳川家初代藩主義直の娘お糸の方（普峯院）の婿として招かれた八条宮智仁親王の第３王子広幡忠幸のため、名古屋城三の丸の北東部に造られた屋敷を始まりとします。さらに延宝三（1675）年、三代藩主綱誠が藩主に就任するまでここで過ごしたことから、御屋形と呼ばれるようになりました。その後御屋形は元藩主の隠居所として、また元藩主の側室が住む場所として利用されていました。

那古野城

戦国時代今川氏が築いたとされる城郭のことで、現在の名古屋城二の丸付近にあったと推定されています。大永四（1524）年今川氏豊がこの城に入りましたが天文元（1532）年織田信秀が攻め落とし、息子の織田信長は弘治元（1555）年清須城に移るまで、ここを拠点としていました。

竪穴住居

通常４～５メートルの規模の円形もしくは方形の穴を掘り下げ、その中に素掘りの穴に柱を埋めて作られた建物のことです。

掘立穴柱建物と礎石建物

掘立穴柱建物とは、地面に穴を掘り、その中に柱を立てて作られた建物です。これに対し地面に石を置き、柱を立てて作られた建物を礎石建物と呼びます。

事業名	国立名古屋病院看護婦養成所大型化整備
事業主体	国立名古屋病院
調査主体	(1)　愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室
	(2)　（財）愛知県教育サービスセンター
	愛知県埋蔵文化財センター
調査支援	朝日航洋株式会社